風韻

第12号

（一九七二年度）

神戸大学風韻会

西行桜…… 宇治正夫

昭和４７年３月１８日　大槻能楽堂

風韻 第１２号 目次

◎ 藤井茂教授御退官記念

会長を辞するにあたって…… 会長・藤井　茂 … 1

風韻の心と藤井先生…… 師範　宇治　正夫 … 3

藤井先生定年御退官に際して…… 新会長　荒川　祐吉 … 5

送　別…… 幹事長　木村富士夫 … 6

藤井教授定年御退官祝賀素謡会番組…… 8

◎ 誌上研究室

観能雑感…… E17　湯浅　憲文 … 10

思い出の能…… P20　中村久美子 … 10

アンケート１へ答える…… B20　山本　秀人 … 14

続　観能雑感…… B20　河野　豊 … 14

旅と能…… B20　山本　秀人 … 16

井　筒（ある幽玄美）…… 紀有　常娘 … 17

◎ 走馬燈

米田　耕造（B20）…19　　河野　豊（B20）…… 20

寺本　博行（J23）…21

◎ 昭和４６年度活動報告

明日へ!!…… J21　木村富士夫 … 22

学連報告…… T21　志智　敏一 … 22

決算報告書…… ２１回幹事会 … 23

◎ あしあと　昭和４６年度…… ２１回幹事会 … 25

◎ 幹事長就任にあたって…… B22　山口　剛 … 26

◎ 名簿変更通知…… 27

会長を辞するにあたって

会長　藤井　茂

一

わたくしは来ル三月末をもって神戸大学を定年で退官します。自然、神戸大学風韻会の会長も辞任することになります。永い間、御厚誼と御支援を賜わった宇治正夫先生、同僚の教官各位、先輩、後輩の卒業生諸氏、現役の学生会員に深く感謝の意を表する次第であります。わたくしの後は荒川祐吉教授が会長をお引受け下さっております。わたくし同様に宇治社中でもあり、すでに副会長として先輩、学生との交流も深く、会の事情に通じておられます。安んじて退くことができるのを幸に存じております。

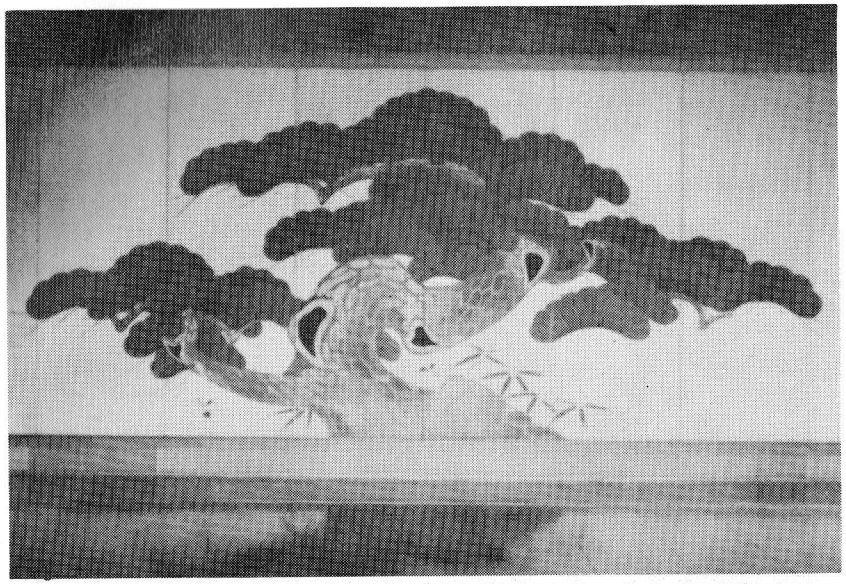
二

神戸大学風韻会の最大の特徴は、学生・先輩の強い連緊と教官を加えての固い組織体であるという点にあると思います。これについては、宇治先生が四十年の永きにわたって師範として学生指導に当って下さったこと、したがって、先輩・後輩が宇治先生を通じて一貫的に緊がつているということが大きな理由であります。また、教官も宇治門下が多く、学生の謡会でも宇治社中の謡会でも、宇治先生を中心に、現役学生、先輩、教官が共に謡う機会が多いわけで、こうした共通の場で共に励み共に楽しむことが積重なつて神戸大学風韻会の強い連帯性が育まれたのであります。

先輩のうち、風韻会以前の大先輩方にも参加して頂くことを念願していましたが、数年前から凌霜謡会の方々に特別会員として参加して頂くことになり、ここに八十幾歳の大先輩から現役学生にいたる三代にわたる年令層を連ねた大同団結が実現しました。祖父と孫とが共に謡う会というのは誇ってよい特徴といえましょう。

三

わたくしは、昭和七年卒業と同時に母校に助手として奉職することになりましたが、丁度その時に宇治先生を師範にお迎えし、神戸大学風韻会がスタートしました。わたくしは在学中は当時の鞍馬会に属していましたが。卒業と同時に宇治先生に師事し、本



師範宅の鏡板

藤井教授・２０回生歓送会　（昭和４７年３月１２日学生会館）

格的な御指導を受けるようになりました。教官仲間が次第に増え、最も多いときには十三人が宇治先生に師事する盛況でありました。わたくしは教官仲間の世話役をし、同時に学生の会の方の世話もするようになって、いつの間にか神戸大学風韻会の会長ということになってしまいました。

わたくしの謡生活は研究生活と併行して参りました。研究は本業、謡は余技という別こそあれ、四十年の神戸大学生活を支える一つの柱でありました。この間の思い出は筆舌につくせません。宇治先生が終始変らぬ熱心な御指導で、学生の謡だけでなく精神的にも大きな成果を挙げられたことは特筆すべきことで昨年、先生の多年の功労を謝して大学当局が感謝状を　呈したことは当然のことでありますが、関係者としてはうれしいことでありました。この上ともに宇治先生の変らぬ御指導を願ってやみません。学生諸君の厚　も忘れえません。謡に関する限り、わたくしは同門の同好の友として接してきました。その間、おのづから礼儀作法が備わり、謡を愛する学生の長所でありました。宇治先生のお躾けを物語っております。卒業生の諸氏も現役学生時代に　われた情　を延長して卒業後もわたくしとの交友は温かく、わたくしはこうした多数の皆様の厚情の中で好きな謡を楽しませて頂いたことになります感謝の極わみであります。

四

幾度か人を迎え、人を送り、その都度謡会が催され、わたくしもほとんど欠かさず出場しましたが、この度はわたくしが送られる番になりました。来ル三月十二日に学生諸君の送別とわたくしの送別を兼ねて謡会がもたれます。わたくしは俊寛のシテを勤めることにしております。長い謡生活の友である福光家慶教授がワキ、米花稔教授と荒川祐吉教授が少しをつきあって下さることになっており、思い出深い謡になることでしょう。

また、わたくしの退官を祝う意味で、宇治先生、荒川教授、井口宗敏先輩の発起で三月二六日に謡会を開いて頂くことになっております。学生、先輩のほかに宇治社中を加えた皆様の参加をえることになっており、只々感謝の念で一杯であります。わたくしは安宅の勧進帳を謡ませて頂くことになっており、ワキは学生時代からの謡の友国重猛氏、同山は学生諸君ということで、一入感慨深いものがあります。

五

こうした皆様の御厚　を心に噛みしめながら、神戸大学風韻会会長の任を退きます。しかし、謡はこれからも続けて行きますし、宇治社中の一員であることはもとより、風韻会についてもこれからは先輩という形で会毎に参加させて頂くのを楽しみにしております。これまでの各方面の御厚　と御支援を謝しますとともに、今後ともよろしく御願い申し上げます。

（昭和四十七年二月二十七日）

風韻の心と藤井先生

師範　宇治正夫

一

昭和の始め、神戸大学（その時分は、神戸商業大学であった）の、銃器係の野瀬虎一氏が、私に学生の謡曲指導に来てくれとの話があったが、神戸在住の伊勢先生が、稽古に行って居る事を、知って居たので、勿論、私は辞退した。所が、その裏面には、いろいろの事情があったらしく、野瀬氏は度々、私の宅へ来て、懇請されるので、伊勢さんから依頼があったら行きましょうと云う約束をした。然し、私はそんな事は、恐らく実現する事ではないと、気にしては居らなかったのであるが、一年近くも経ってから、伊勢氏から、神戸大学へ稽古に行ってやってくれとの連絡があり、学生の高崎（現在大本）貞男氏が来られて、正式に依頼を受けたので、上筒井の学生会館へ指導に行く事になったのは、昭和七年の春であった。その時の学生の重立った人は、今の藤井先生を始め、高崎、国重、生田藤本の諸氏で、野瀬氏と高崎氏は、随分熱心に私と学生との間を、奔走して下さった事を忘れる事は出来ない。世界戦争の始まる頃には、野瀬氏の手記が記録として随分嵩高い書き物となって居たのには、驚いたものである。

二

右のような経路を辿って、次第に藤井先生に神戸大学の謡曲部の面倒を見て頂くようになり、教授の先生方も、私の宅へ来て下さるようになって、元学長の花戸竜蔵先生、古林喜楽先生、柚木馨先生、八木弘先生と、歴代の学長を始め、諸先生方十三人も集って頂いて熊内橋通の私方での週に一回の稽古には、謡の稽古の外に、有益なお話も出て頼もしくも心強い時代が、かなり長く続いた。

三

そのうち、世界戦争が段々激しくなり、全国の謡の先生は、大方軍需工場に身を置くようになり、私もさる人の紹介に依り、東洋ベアリング（当時の社長、丹羽昇氏）に、生産増強の為には、謡の稽古をさせることが、最も良いと力説した。その故は、

一　何事をやるにも、心をこめ、力一杯やることが必要であり、謡の稽古は、即ち全精神と全勢力を打込む稽古であるから、精神統一には、一番近道である。

二　一日の勤めを終り、静座して、力を入れて発声する為に、疲労忽ち回復し、明日の活動の源泉となる。

こと等で、この主張に共鳴して、直ぐに私を会社の嘱託として章工員の謡曲指導を任された。それから毎日数多い寮を廻って指導し、休日には、慰安のため、大広間と舞台もあった水明寮等で、発表会を催して、藤井先生には、二三の本職の先生に交って、指導を手伝って頂いたのも、度々であった。

四

戦後いち早く学生謡曲の復活したのも、先生のお骨折りに負うところが大きい。復員した学生諸君が疲弊した環境の中で、声をはり上げて、謡の稽古にはげんだ事は、教える私にとっても、教えられる学生諸君にとっても、忘れえない思出である。その後も、今日に至るまで、学生間の能謡に関するあらゆる面で、相談相手になり、私を後援して下さったことは、私の生涯を通じて、たとえ様の無い有難いことであると思っている。依って今月先生定年御退官祝賀の会も、私は、藤井先生に感謝する会とか謝恩会とかの名目にしたかったのであるが、先生の御意志によって、前記のように改めたのであって、先生の謙虚な御気持を一層尊いことに思うのである。

藤井茂先生定年御退官に際して

新会長　荒川祐吉

御自身も神戸大学風韻会の大先輩であり、また永年にわたり、部長として会の発展のため、ほんとうに細かいお心遣いによって、御尽力を下さった藤井茂先生を、とうとう、お送りしなければならぬときがきてしまいました。思えば、昭和二十八ー九年頃でしたか、先生から奨められて、何とはなしにお稽古を始めさせて戴くようになって以来、ただただ先生に全面的に頼りきってしまい、いつまでたってもその御好意にあまえたまま、副部長として今日までにいたった私を、先生は恐らく、歯がゆく思っておられたことと思います。いよいよ先生をお送りすることとなって、果してこれから私のようなものに先生の跡が継げるのだろうかという不安が、ますます大きくなってきています。

けれども、先生は、今後も、宇治先生の御社中の一員として、また、御勤め先は変っても御住まいは、われわれの大学の最も近いところに、引続いて居られると承わっており、折に融れ、何時でも、御指導御助言を賜わることができるようですので、そのことを一つの支えとして、甚だ微力でありますが、ともかくもできる限りの努力を会のために払っていきたいと念じております。

ともあれ、神戸大学風韻会の隆盛は、いうまでもなく会員である学生諸氏の努力、精進と、そして何よりも積極的な「参加」の意志にかかっていることはいうまでもないでしょう。私自身の役割は、何よりもまず助言者であり、そして、これこそわが風韻会の特質だと思うのですが、高商、商大、大学とつづく数多くの大先輩、中先輩、小先輩との一体となったつながりを、ますます緊密かつ充実したものにする橋渡し役として努力することにあると思っています。

ここに藤井先生を、「ひとまず」、お送りするに際し、深甚の感謝を捧げると共に、今後とも　先生の御指導、御助言をお願いし、併せて学生会員諸氏の御健闘を希望する次第です。

送別

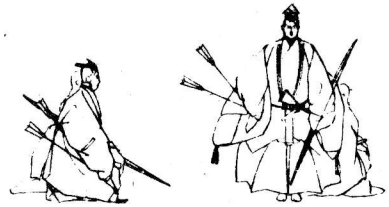
幹事長　木村富士夫

時は移り　時は去る
長くもあり　短かくもある
思い出が　浮びくる
嬉しさが　楽しさが
時は移り　時は去る
現在存するものに
思いは　遠く
六十路を過ぎぬ
長くもあり　短かくもある
時は移り　時は去る
秋の嵐に　冬の雪
世が　いかに変ろうと
静かなる川の流れにも似て
長くもあり　短かくもある

謡い続けて　四十年
日が登り　日が沈む
苦しみが　悲しみが
再び　よみがえる
過ぎ去りしものに
未だ来ぬものに
二十才の若者も
謡い続けて　四十年
日が登り　日が沈む
春の風に　夏の夜に
謡う声が　溶けこむ
幽玄の美は　変らぬ
謡い続けて　四十年
日が登り　日が沈む

時は移り　時は去る
門出を祝う祝言の
消えることなく
謡う声には　変りなく
長くもあり　短かくもある
時は移り　時は去る
永遠に　変らぬものは
その美を　求めて
それが　また美しい
長くもあり　短かくもある

新しき人生の
声は　永遠に
世が　いかに変ろうと
謡い続けて　四十年
日が登り　日が沈む
人の世が　変ろうと
美しい
謡い続けること
謡い続けて　四十年
日が登り　日が沈む



昭和四十七年三月二十六日（日曜日）午前十時始

藤井教授定年御退官祝賀

素謡

養老　宇治みつ子　宇治正夫　小西巌　福田啓介　木村富士夫

東北　谷本繁　原敏郎

小督　沖中征論　中本繁春　大段秋一　高木一

善界　戸次威左武　段野治雄　林一馬

放下僧　船橋靖雄　山口剛　小西巌　初田隆一　植田英俊

大原御幸　河野豊　荒川祐吉　米花稔

鵜飼　吉田道夫　大良晃彦　中本繁春

蟻通　青本又雄　伊藤欣二

忠度　田中六郎　植田勝弘

仕舞

通小町　山本秀人

敦盛　河野豊

景清　福光俊六　福田好男　西尾雄一　山崎秀雄

杜若　内海実　大本貞男

葵上　谷本繁　井口宗俊　藤尾豊一　伊沢幸嗣

草紙洗小町　城戸隆一　高島千明　菊地侃　高木一

独吟

笠之段　前田一二

弱法師　栗岡治作

阪急六甲北出口前　若林邸内

於松泉館

電話神戸（861）二六九三番

千手　連吟　柚木八十枝　栗津緑　中田都

隅田川　前田英一　若林与左衛門　原敏郎

藤戸　小杉岩蔵　高岡幸彦

難波　仕舞　志岐佳代

網之段　横山博江

高砂　小杉岩蔵　松下きせ子

融

舞囃子

采女　粟村かほる　若林与左衛門　関浦昭子　若林秀雄

班女　宮本靖子　若林与左衛門　前田英一　若林秀雄

荒川祐吉　豊島又衛　大木貞男

連吟　三崎典子　苅田久子　中村久美子　小田裕美　加藤美千代

羽衣　山口剛　赤木康雄　長沢洋志　中川憲智　山本秀人　河野敏一　福田啓介　豊木村富士夫　志岐佳代　藤井茂　国重猛

安宅　勧進帳

祝言

記念謡曲会

世話人　荒川祐吉　井口宗敏　宇治正夫

誌上研究室

観能雑感

E 17 湯浅憲文

学窓を巣立ってすでに丸三年、数えてみますと、我々十七回生が四年生になった年に入学してこられた皆様が今年御卒業の予定ではないかと思います。自由な学生時代の頃がなつかしくよみがえってきます。最近は能を見る機会も少なく、せいぜい年に一～二回がやっとです。それでも謡の方は会社のクラブにはいって、暇を見つけては昔通り大声をはり上げております。

さて、一番最近に見た能は昨年夏、長田神社で行なわれた薪能です。井上嘉久師（記憶がさだかではないのですが）の舞われた半能天鼓には深い感動をおぼえました。青年天鼓が弔いのお経に姿を現わし、本当に面白そうに、無邪気に鼓とたわむれ遊ぶキリの部分が、誠にさわやかで、気分そう快になったのを覚えています。

我々が在学中は、教育学部が御影の赤塚山にあって、土曜日には東灘警察署の道場を借りて合同練習を行なっておりました。そのある日、宇治先生に能や謡は心で見て、心で聞くものだと教えて載いた事がありました。鉢木の一節「あゝ降ったる雪かな。いかに世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似・・・」を先生は私達に聞かせてくださった後「これが皆さんの心の中でどれ程に聞きとられたでしょうか」と笑顔で問われた事を記憶しております。

「その人の芸術の良さが分ると言うのは、少なくともその人と同等の、あるいはそれ以上の技量を持った人に限られる」ということがよく言われます。私はこれも真実だと思います。問題はその芸術がどのように良いのかという内容であって、結局は観賞する個々人の如何にかかってくるのではないのでしょうか。芸術に対する個々人の相対的な理解度を否定することなく、しかも、まだまだ向上すべき不可解な段階があるのだということを念頭に置いて、練習にはげめば、それこそ立派なたのしい謡になり仕舞になるのだろうと思います。又、同時にそれによって見る目も一段と良くなるのだろうと思います。

学生時代に風韻会の一員であったことの有難さに感謝しつゝペンを置かせて載きます。

（一月二十三日）

思い出の能

P 20 中村久美子

「能のクラブにはいっています。」と言うと、いつも一種の驚きを伴った言葉が、かえってくることに・・ちょっとした反発を感じていました。そして、そんな時、日本人が日本の伝統芸術に興味を

もつことは、本当に、驚くべきことなのか・・・また、驚くような感覚に何がそうさせたのか・・・ということを、考えずにはいられませんでした。確かに、能は批判されるべき点をもっています。

「ブルジョア的」「聞いていて、何を言っているのかわからない。」「テンポが非常に遅い。」「退屈」「封建的」　は、よく言われることです。しかし、能には、それらの批判の前にも屈しないだけのものが存在していて、それがあるかぎり、能は、日本文化の本流として、生命を保持することができると・・いえるのではないでしょうか。・・そして・・そのものとは「心」だと思うのです。人間にとって「心」ほど、大切なものはありませんが、その人間が創り出す芸術においても同じことが言えると、思うのです。本当に、能ほど、「心」を働かさなければいけない芸術は、世界でも、数少ないのではないでしょうか。「居グセ」において、シテは、じっと動かずにいますが、その時ぐらい演者の力量が推定される時はないと・・聞きました。ただすわっているだけなら、あの広くて何もない舞台に負けてしまいます。まして、そのすべての空間をひきしめることなど、不可能です。あの空間の中で、一つの心が、ぐっと抑制されて、あたりをひきしめているという感じ・・動くべきものが動かずにいる位置の確かさこそが、何よりも強い表現となって、私達の心に伝わってくるのだと思うのです。それは、ひょうびょうとした蒼い空間の片すみに、一つの岩をあしらって全体をひきしめた絵のようにも思えます。その岩は、絵の中で確かに生きているのです そして、かすかに・・波の音とも、風の音とも、識別できない・・クセ謡がその絵の中から聞こえ、見ている者の空間は、それに共鳴して、溶けてしまうように思われるのです。またそのような　物の・居グセばかりでなく、「清経」のような修羅物でも、梨子打烏帽子をかぶったりりしい公達が、太刀をぬいて舞う、気迫のこもった姿は、激しい波の音が聞こえる蒼い海原の空間を、自由奔放に切って美しい軌跡を、人の心に残していくような感じがするのです。能のあの「動十分心、動七分身」（「花鏡」）の精神は、能を難解にし、幻想的にし、象徴的にしましたが、その「心」こそ、能の生命であり、能が芸術として高く評価される所　だと思われるのです。

ところで、私達は「思い出の能」という企画にあたって、二つのアンケートをとりました。表Ⅰは、関西能楽連盟の秋期大会会場において、アンケート用紙を六十五枚配り、そのうち回収された五十枚をまとめたものです。やはり、印象にのこった能としては、ストーリー性の強い変化のあるものが多いようです。また、回答の中には、「何でもいいから、上手な人のものが見たい。」という希望も少なからずありました。

表Ⅱのアンケートは、神大学生五十人に配り三十五枚回収したものです。クラブ外の人が、どんな考えをもっているか・・比較的興味がもたれるのではないでしょうか。（アンケートについての詳細な批判・・感想　は、各自におまかせすることにします。）

とにかく、このアンケートをまとめているうちに、能のクラブにはいっている学生の使命というものをつくづく感じた次第です。単に、おけいこごとでやっているのではなく、若い感覚で伝統芸術にアタックしているのだ・・という自覚のもとに、やがて・・美しい花を咲かせることを祈って、いろんな方法で「能」という種をまく努力を惜しんではならない・・と、つくづく思った次第なのです。

アンケート〔Ⅰ〕

順位＼質問	今まで見た能の中で印象にのこったもの		これから見たい能	
1位	紅葉狩	11	鉄輪	7
2	道成寺	10	松風	6
3	葵上	9	道成寺	5
4	善知鳥	8	屋嶋	4
5	船弁慶	7	紅葉狩	3
6	熊野	6	土蜘蛛	3
7	土蜘蛛	5	井筒	3
8	野宮	4	隅田川	3
	井筒	4	砧	3
	女と影	4		
	清経	4		

以下略

1971　秋

対象者　関西能楽連盟　秋季大会　出席者

回収率　$\frac{50}{65}$

アンケート〔Ⅱ〕

1971　秋

対象者　神戸大学学生（風韻会及宝生会を除く）

回収率　$\frac{35}{50}$

① 貴方は

（男 → 24人　女 → 11人

（文科系 → 25人　理科系 → 10人

② 今までに能を見たことがありますか

（ⓐ はい → 24人　ⓑ いいえ → 11人

また見たいと思われますか

（ⓐ はい → 30人　ⓑ いいえ → 5人

能について　どのような感想をもっておられますか。

（2つ以上○をつけられてもかまいません）

ⓐ 古くさい	→	0	ⓕ 空間的	→	10人
ⓑ ブルジョア的	→	3人	ⓖ 精神的	→	12人
ⓒ 排他的	→	2人	ⓗ 前衛的	→	1人
ⓓ 退屈	→	4人	ⓘ 厳格	→	9人
ⓔ 象徴的	→	20人	ⓙ 完全	→	6人
			ⓚ その他	→	4人

ⓚ その他　難解・現実否定
美的
超時間的普遍性

③ 貴方は　能の価値をどれに認めますか。

ⓐ 認めない	→	0	ⓒ 芸術性	→	24人
ⓑ 伝統性	→	9人	ⓓ その他	→	2人

ⓓ その他　●わからない
●能の価値とは一体何か。

④ 能は今　五流にわかれていますが、それについてどう思われますか。

ⓐ 当然	→	6人	ⓓ わからない	→	20人
ⓑ しかたがない	→	5人	ⓔ その他	→	1人
ⓒ おかしい	→	3人			

ⓔそその他　（無回答

⑤ 現在　演能されている曲数はどれくらいあると推定されますか。

ⓐ 1000以上	→	1人	ⓔ 約400	→	1人
ⓑ 約1000	→	2人	ⓕ 約200	→	18人
ⓒ 約800	→	0	ⓖ 約100	→	9人
ⓓ 約600	→	1人	ⓗ 100以下	→	3人

⑥ 能について　しいていえば何に関心がおありですか。

（二つ以上に　○をつけられてもかまいません）

ⓐ 舞台	→	11人	ⓕ 扇	→	4人
ⓑ 囃子	→	14人	ⓖ 能役者	→	4人
ⓒ 衣装	→	4人	ⓗ 舞	→	15人
ⓓ 能面	→	22人	ⓘ 能作者	→	6人
ⓔ 謡	→	14人	ⓙ その他	→	3人

アンケートへ答える

B20　山本秀人

今までに見た能の中で印象に残った物と申しても色々あります。最初に感動したと言う意味でいまだに好きなのが「通小町・雨夜之伝」梅若猶義。何度見てもその芸づくしぶりに感心し面白いのは「道成寺」。その演出法が印象に残ったのは、一昨年観世栄夫演出で観世寿夫が万博の時鉄鋼館で舞った「善知鳥。」舞台の美しさが印象に残るは「三輪・白式神神楽」「葛城・大和舞」「采女・美奈保之伝。」演者により曲趣がかくもかわる物かと感じそれぞれに面白かった「景清」。進向に全く無理がなく計算されているといつも感じる「藤戸」。見る内に自分を忘れており最高の曲だと感じる「井筒・物著」。「求塚」舞よりは舞踏に近いような面白さを持つ「石橋」。そのさわやかさが心に残る「高砂」「養老・水波之伝」。以上の他にも非常に心に残るのは、「隅田川」「野宮」「松風」「船弁慶・重キ前後之替」「能野」「清経・恋之音取」「杜若・恋之舞」「恋重荷」「大原御幸」このようにあげると、今まで見た能の中で印象に残る物を一個などと漠然とした質問になど答えられない。

続観能雑感

B20　河野　豊

前回は臆面もなく、言いたい放題であったが、今回は、卒業を控え自分の高い鼻も、少々は低くなってきたようで、前回程に面白くないかも知れないが、まずはお許し頂きたい。

今年元旦やはり例年の如く京都観世会館の謡初がまず皮切で、正月十日には、金剛の女流若手師範の能舞なるものを見たが、招待されたものの、実につまらなかった。舞囃子に毛の生えた様なものであった。

三月上旬、就職試験や歓送会でごたごたしているときに大槻清韻会で雲林院、宇治先生のを見た。私は雲林院という曲は少なくとも三回は見ているが、前シテの部分が大好きで当日の日記には、先生は完璧だったが、ワキがだめであったと書いてある。

そして四月に入り今年最高の催物である観世左近追善能が始まった。まず京都で家本の卒都婆小町、片山博太郎の安宅、杉浦友雪の半蔀、中でも一番良かったのは、友雪氏の半蔀立花供養で、次に安宅延年之舞見立見付であった。博太郎氏は安宅のシテには体格不足とも思えた。が同山が片山一門で良く揃っていた。浦田保利氏の海士、赤頭三段之舞も鎌を持って、橋掛を使って舞う玉之段が、おもしろかった。二日目は、片山慶次郎氏の弱法師、盲目之舞、井上嘉久氏の熊野、村雨留膝行留、墨次之伝、観世清和氏の鷺、観世元

昭氏の道成寺赤頭之伝であったが、どれもこれといった優れたものはなかった。慶次郎氏の弱法師は割に良かったのだが、少しはでに感じた。熊野の小書も、これほどつくのは、余り見る機会の無いものだが、どうも、見てしまえば、それで終りのような感じがした。元昭氏の道成寺は、元昭氏自身体が大きすぎるのと、大倉長十郎氏の気迫に負けたのか、乱拍子が、冴えなかった。京都の追善能で、一番良かったのは、半蔀、安宅がその次に良いできであったと言える。しかし総じて、二日間で七千円の投資の価値はあった。

次に見たのが、大阪での左近追善能。番組は、稀曲、「輪蔵」梅若猶義、宝生弥一の「景清」、小返　更に京都と同じ「鷺」そして観世元昭の「砧」で、最後の正尊は、見ずに帰った。中でも一番良かったのが、猶義氏の「景清」で、シテ、ツレの掛合、ワキとの掛合、シテの心情表現、語と、どれをとっても優れており、ツレ・トモと良く呼吸があっていた。特に最後、シオリ止メの後、シテとワキが舞台を去って行く、その橋掛までが、余韻を含んで演じられていた。最後まで、舞台を大事にする人のように思えた。しかし残念なことに、地が不揃いで、まことにまずかった。元昭氏の「砧」は、やはり体が大き過ぎたが、地が、梅若猶義、ワキが宝生弥一と揃っていた。山本孝の大鼓のうるさいのは、相変らずだが、猶義一門の地の品の良さが救ってくれた。砧も小書、梓之出端となると、面が霊女となり、謡も激しくなるが、僕は泥眼の方が好きだ。最後に輪蔵はスペクタクル・ショーとしては、面白かったが、見てしまえば、何ということもないものである。まず景清、一番で三千円の値打あった。

同じ五月に、金剛の定期能を見に行った。芦刈・西行桜・殺生石とあったが、西行桜が始めて見るものだけに、興味深かった。殺生石は、さすが型金剛の名の如く、キリでキツネのような足使いがあり面白かった。

そして五月の最後に、森田家の追善能で、梅若六郎氏の「姨捨」を見た。これは、さすがに大曲で、相当勉強して見に行ったのだが解らなかった。当初、老女の表情が不可思義なものと思われ、その理由が解らなかったが、後になって、美しくはあるが、愛憎を超えたものであるために、判然としなかったのだと悟った。この能では、技、気の上に更に、その人の人格、修養が問われるのではないかと思われた。仏でもなし、人でもなし、何がその先にあるのかは、未だ理解し難いものであった。この能を見て以来、しばらく能を見ることから遠ざかり、冷却期間を置くことになった。一様、僕としても、頂点まで見て行き詰りにきたので、暫く、静かに考える時間を持ちたかったからである。その変りに、歌舞伎や他の芸能絵画に興味が湧いてきて、次に能を見た（途中、神戸国際会館で、追善能に行ったが、席が悪く、眺めたに過ぎなかった。）のは、九月になってからで、宇治先生の「景清」だった。能を見る以前に、既に稽古をして頂いていたので、良く解った。特に「松門独り」以下の箇所は、何度やっても、出来なかった所だけに、耳に今でも、残っている。また語以下は、強い印象を受けた。派手ではないが、強い所作に、充溢した気力を伺いしれた。一様今年見たのは、以上の曲で、昨年に比べて少ないが、大曲見て来た。現在の所、あまり能を見ても面白くない。今は、先生の謡を聞いているときの方が楽しい。と

いうのも、安心して聞いていられるから、ここ当分は、謡と仕舞だけにしておくつもりである。

以上

旅と能

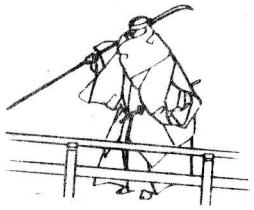
B20 山本秀人

旅を一言にして言えばけだし「他との共感」の一句につきるだろう。他とは自然であり人である。人は人情といいかえてもよかろう。我と自然との共感は、内面志向の時と共に、同一化に共なう自己の解放を持たらす。我と人との共感はその旅情の増幅を持たらし、人間性肯定の確信をも与えてくれる。私達が日々生活している世界は西欧的合理主ギの社会である。この社会のパターンは主張することである。ところでこの主張すると云う事の裏には、当然同意への欲求が存在する。ところが、今目的々合理主ギ社会に於ては、常に同意は、理路整然たる主張にのみ与えられる。とすると人間の持つ不条理性はどうあつかわれるか。そこではそれは、排さるべき弱さとしての価値しか与えられない。そこで私達は、主張する事も、される事もない状態を一時的にでも希求する事となる。その一つが旅である。

さて日本文化の特色を源了円は「恥と共感の文化」といった。いかにも日本に於ては明治に至るまで、主張の文化は華開かなかった。時たまある主張はたいてい死を持って行われた。その故に、日本の古典文学作品は常に語りかけるようにできている。（欧州の作品は問いかけている）能楽、又しかりである。極度に省略されたしぐさ、装置は、観衆とシテとの同一化をぬいては、単に欠伸をさそうだけの物である。が一度共感が得られたならば、それが、純であるが故にこそ我々を夢幻の中へ引き込まずにはおかない。我々はシテに共感する事により内省の時間を得る。物に執着しなければならぬ哀しさ、人を恋うる嬉しさ愁、親子の情、移りゆく容色へのなげき、これ等、人であるが故の不条理性に共感し自分の内なる人間を打ちふるわせるのだ。

ここに於て、旅と能とは共通する。すなわち、共に人間の復興を志向すると云う事だ。能楽は封建農民の疎外感の内より生れ、室町貴族の自己疎外感の中で成長した。ユース・ホステル運動等の旅を見なおす運動は、機械文明の中の自己疎外感より生じた。共に自分の内なる人間と他との共感を志向せんとする動きであったし、現在でもそうである。

ただ、ここで忘れてならぬ事がある。それは、旅や能が単なる逃避の場であってはならぬと言う事だ。私達は、この中で現代に於る否、社会が形成されて以来、必然存在としての自己疎外を解決するパターンを漠索しなければならない。



井筒（ある幽玄美）

紀有常娘

待っています。今日もこうしてちょこんと縁側に座わって、一日中。ぼんやり。誰を待っているのかですって。人を待っているのではありませんわ。でもお庭を眺めているふりをしていても、すぐに御門の方へ目がいってしまう。今にもひょこっと、あの人。そりゃあの時は悲しかったわ。急にお心変りなさってよその女の人のところへ行ってしまったのですもの。今はもうあの人の事はすっかり忘れてしまった。だって業平様はずっと昔にお亡くなりになられた人。でもこうしていると、ふとあの頃を懐かしく思いだしてしまう。台所の匂い、雨戸を開ける音。お茶腕の冷たさ。直衣の、絹の肌ざわり。みがきあげた家具の艶。そして、あの人の影。生活の感融、それだけでよかった。仕合わせだなんて考えた事もないのに。でもいつの頃からかしら、こうしてぼんやり、あてもなく待っようになったのは。そうあの時も、いつものように御出仕を見送って、お掃除も終え、こうして縁側で静かに縫い物をしていて。そんな時だった。クッと胸を・・。いいえ、あぶくがひとつ池の底からフワッと浮かび上がってきた様な感じ。ちがう。小さな灯、昼間は明るくて見えないけれど、あたりがスーッと暗くなって鮮やかに輝き出した感じ、近い。何を待っているのかしら。現実。急に恐くなって、体がブルブル。かくれんぼうをしていて、絶対見つからないと思っていたのに後を向いたら鬼が立って意地悪な顔をしていた。私の胸の中に何か嫌なもの。いいえ美しいもの？　そしてそんな時に。あの人の浮気。業平様は恋に生きた人。私もそうだった。でもそれは遠い昔の事。こんなに年をとってしまうと、思い出も人事のようにみえてくる。井筒の恋。甘いロマンス。光の中で、ドキドキしながら。待っていた。だけど恋って不条理。ピリオドを打てない哀しみ。ぼんやりしていて段々尻尾が細くなって、知らないうちに消えてしまう。だのに何かが土足でドカドカ上がり込んできて、ブチ壊し。一生懸命待っていたものが裏切られたって感じ。それでも、あの人が他の女の人のところへ行ってしまうと、私はあの人を待つようになった。互いに二度と心が戻ってこないのを知りながら。落ちつけた。安心だった。わけのわからぬものを待ち続ける不安より。あの人の浮気を有難くさえ思った。人待つ女といわれたのも、そんな頃。ああ、それも遠い昔の思い出。あの人はもう此の世にいない。灯がひとつ、ふたつ消えていく悲しみ。でも女ってあきらめられないものよ。今でもこうして待っているもの。目を閉じて、じっと耳を澄まして、待ちましょう。幸福の足音？　いいえ。遠くで、ほととぎす。卯の花の匂い、ひぐらし、入相の鐘、夕暮。でも夕暮はきらい。闇がせまってくると、何だか心細くなってくる。暗闇の中で、関係なく一切が過ぎ去っていくって感じ。女には仕合わせも不幸もないってほんとう？　嘘に決まっているわ。ただ女は声をあげられないだけ。わあっと大声で叫ぼうとして声を出してみても、ああっと、小さなかわいい嘆息。蛍に似ている。ほら、あの真暗なお庭を今にも消え入りそう。美というのも、あんな風に頼りげないものかしら。無意

味ではかなげない小さな光。私の胸の中でもそんな炎が燃えている様な気がする。女の執念？　おお嫌だ、ちがう、ちがう。それはね、「待つ」ということ。いつまでも待ち続けること。でも、何を待っているのかしら。とても大きなもの。小さなもの？　愛。ちがう。幸福。ちがう。待つっていうことは何？　女の哀しさ、心。弱さを生きる祈り。どろどろしたもの。非合理。青みどろ。目まい。全部ちがう。わからない。だけどこうして待っているってことだけはほんとう。ずっと待ち続けてきた。長い長い年月。気の遠くなる様な時の流れ。ふと、それを思うと泣きたくなってしまう。井筒の女といわれた頃は何かと明るく、浮き浮きとして待っていたのに今は闇の中。でも、まだ少し、ぼんやりと明るい。じっと息を殺して、待っていましょう。

何も、無かった。

私は遠い昔に死んだ女。いいえ、それはあの旅の僧のはかない夢。そして無であるあなたの夢の中。その完全な闇の中で光る小さな炎。それは虚無の空間に浮かぶ一点。その一点は虚無とは明確に区別される故に。闇は深く、炎は弱々しくはかなげである程に、美しい。しかし何故に？。

大衆酒場
コンパにどうぞ
ぜ い 六
市電六甲口下ル西角
電話（851）4787

パチンコ
ミカドホール
阪神御影駅東１００ｍ高架下

新装開店
落ちついた雰囲気の雀荘
六甲クラブ
市バス六甲口から南へ３０ｍ下る
（821）2689

酒類
食料品
商
みどりや
神戸市灘区水車新田
（市バス神戸大学停留所前）
TEL（861）0535

ちゃっとうゆうど

（続ならびに完結編そして決定版）

B20　米田耕造

三月十七日（金）P・M5時、於ウィオレッタ

山本「夏の合宿どこでやんねん」

河野「きめたんなや、かわいそうに」

木村「九州へ行くという話も・・・」

山本「休暇とるわけにはいかへんしなあ」

「富士五湖か日光にせえや」

木村「そういう話もあるんですけどねえ」

（中略）

河野「絶対書けへんこというたろ」

（中略）

山本「横山さんのくやしそうな顔、三崎さんの笑い顔、もう見られへんなあ」

「小田さんの悲しそうな顔もええなあ」

河野「小田さんの手指がきれいやなあ」

「神戸へきてから美人が増えてなあ、友達にわらわれた。」

河野「いちばん化粧うまいのは誰やろ」

山本・木村「・・・・。」

（中略）

河野「二十二日鑑賞会行くんやな」

山本「絶対、行くねんでえ、当然」

「木村っ、お前も参加するやろ」

河野「安いからなあ、七百円や、学割もあるし。

河野「誰がいくんや」

山本「赤木は首謀者やし。山口連れて行こや」

（中略）

河野「今日は俺の誕生日や!!」

山本「あ、ほんまかぁ。おめでとうございます」

米田「おめでとうございます。」

原稿を頼まれてから三月間、結局何も書けず、（書きたいこと、言いたいことは山ほどあるのに）こういう形になってしまった。

三年ほど前の『風韻』に、先輩のこういう言葉があった。

「とにかく四年間続けること。そうすれば必ず何かが得られるだろう。」

この言葉をそのまま後輩諸君に送る。僕がまがりなりにも四年間続けられたのはHOWEVER諸先生、諸先輩、後輩諸君、就中、すばらしい同輩の力添えによってである。最後に、僕が心からスムーズに口に出きる数少ない、言葉を記して、結びとしよう。

ありがとう。ごめんなさい。がんばります。がんばって下さい。

お世話になりました。がんばります。ごめんなさい。ありがとう。また会いましょう、きっと。

四年間を振返って

B20 河野 豊

今から思えば短い四年間であった。美しい女性に誘われて、風韻会に入ったのが、大学生活が始まって一月程経た頃、すぐにJr合宿があったのを覚えている。後で聞いた話だが何も私だけが、女性の美しさの故に入部した訳でなく、他に男子、二、三人はいる。当時の先輩方は、我が風韻会に、そんな美人がいたのかと、不審に思われるかもしれないが、我々には、そう見えたのだから仕方ない。まず、我々の入部（こう書けば、異議を唱える者も居ろうが）の動機はざっと、このようなものである。

ところで、私が本当に謡をやろうと思ったのは、学連における米田君との仕舞での失敗からである。生来、負けず嫌い故に、あのとき以来、必死に練習をし、二年の六月から宇治先生に習いに行き出した。それ故、今習いに行っている。山口君や伊沢君よりは、一年程、習い始める時期が遅かったのである。

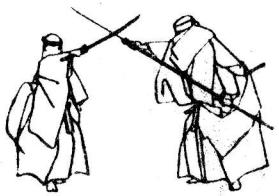
思えば既に宇治風韻会に入って二年半経たわけで、最初の頃は、宇治先生宅の会が、眠くてしょうがなかった。何しろ自分の知っている謡が、その会の全曲の中の二、三曲であったのだから仕方無い。本当に素謡会が面白くなり出したのは、能を、ほぼ毎週見た、あの三年の、若かりし時代からである。今では、能より素謡の方が好きである。

しかし四年間で一番思い出に残る事というと、やはり、安宅の勧進帳をやらして頂いたことである。準九番、九番と順々に習いながら、その相間相間に、一年がかりで、先生に手とり足とり教えて頂いた訳で、この安宅の曲以来、僕の謡が少しではあるが、変ったのではないかと思う。何しろ発表前の二月程は、卒論の提出と英会話とで、安宅の練習は、精神的にも、肉体的にも、自分の限界を超えていた。一月三十日、安宅を謡い終ったとき僕の大学生活の最後難関を通過したという安堵感で、気力も体力も一瞬消滅したかのようだった。この曲以後、謡の恐しさを、どの曲に対しても感ずるようになり、下手に先生に習わず謡うというような事が出来なくなった。

仕舞については、僕が何度も舞ったのは、「鉄輪」だったが、今では、歓送謡会で、二年の女子（地頭を志岐佳代君にお願いした）の地謡で舞った、「忠典」が、一番印象に残っている。

舞　子は、班女、高砂、巻絹と、先生と風韻会の好意で、三番やらして頂いたが、最初の班女では、上がってしまい、腰が痛かったことだけを覚えている。二番目の高砂は、四年の秋期発表会で舞ったが、以前から舞いたいと思っていたものだけに、気持よく舞えた。三番中、一番の出来だったと思う。巻絹は、神楽で、段直りするところまでの、神楽のところは、最後まで気分がつかめず、舞っていてもさっぱり自信がなかった。神舞になってからは、我然、はりきって、気持よく舞えた。今一番好きな舞は、神舞である。舞っていても実に気持がいい。

以上好きな事を書かして頂いたが、歓送会での最後の謡「葵上」に、病気にもかかわらず良く練習に来て下さった二年の山口剛君、女性では無理かと思っていたが、十分にワキを謡いきって下さった二年、志岐佳代君、猶ワキツレをして下さった木村富士夫幹事長、地を謡って下さった四年同輩諸君に、心からお礼を申し上げるとともに、これまで好きな事を云って困らせてきた風韻会の諸君、そして最後に今まで謡のみならず、人生問題、生き方までも教え導いて下さった、またこれからも迷惑をおかけする宇治先生に、卒業に際して心から感謝の意を表します。



戯言

J23 寺本博行

眉をひそめているのは「自惚れ」です。目に笑をたたえて拍手しているのは「追従」です。とちりとちりと居眠りをしているらしいのが「忘却」です。両肘を突いて手を組んでいるのが「怠惰」です。バラの冠をいただき、香油の匂いを漂わせているのが「逸楽」です。むっちりした肉づきで、艶々した膚をしているのが「放蕩」です。始終きょろきょろした目つきをしているのは「軽躁無思慮」です。ちょっと辺りが気になりだしました。見廻してみましょう。誰もいないようです。へんなしぐさですね。大声で笑ってみましょう。「大賢は大愚と見せるにある」といわれますからね。私は幸福を求めているのです。しかしあまりにも早く幸福を求めようとすると追い求めている幸福は一種の錯乱狂気に、です。

これはすべて戯言です。忘れてください。もの覚えのよい人はまっぴらです。最後に一言いいたいのですけど、「狂人はしばしばもっともなことを語る」ということは現実にあるのでしょうかね？そんな事はどうでもいいですね。声高に笑いましょう。

昭和四十六年度活動報告

明日へ!!

J21 木村富士夫

遅いようで早かったこの一年、行事に振り回され過ぎて思うような活動ができなかった。練習内容も盛り上りがなく、行事をこなすための練習でしかなかったような有様だった。練習にしても、ただでさえ部員数減少の傾向があるのに、参加者が少なく、最初の計画であった連吟の練習等、実現できるはずもなかった。参加者が少なくなったのは、理系の部員が多いということもあるだろう。しかし、それだけではないように思える。人間関係を求めて、或いは技術習得を目的としたもの、サークルに入った以上は練習に顔を出すのは当然であろうし、練習のやり方が不満であるなら、その事を主張すべきであろう。そして練習に来てはいても、いつの間にか帰っているというような事も多くなった。

伝統というのは、ただ単に長く続いてきたというだけではない。先輩が積み重ねてきたものの中より、良いものを選んでそれを後輩に伝えていく。それが本当の伝統であろう。

しかるに、現在の風韻会は伝統という重みを支えきれないで、真の力を発揮できないというような所がある。風韻会が、真の力を発揮し、新しく生まれ変り、そして発展していく事を願ってやまない。そのためにも、明日からでも何かを始めよう。レッツ、ビギン!

学連報告

T21 志智敏一

この一年間学連の渉外をやってきて、感想を一言述べるならば次の様になる。「斯くも学連とは素晴らしきもの哉」ハッタリではない、本音です。しかしそれは内側に於いて言える事であり組織面等考えると、問題は数多くあるのであって、例えば来年度より大阪の帝塚山学院大学（奈良の帝塚山大学とはちがう）が加盟することにより、十六校という大所帯を抱えるというのもそのひとつであり、その他問題点を挙げていくとキリがないけれども。しかし。不可能ながらそれだけやり甲斐があるというものであって、何故に? 純粋な行為である故に、留年するとわかっていながら試験を受けるという甲斐ない努力の美しさに少し似ている。まあそれはそれとして、今後風韻会の学連に対して望むところは、もっと積極的な姿勢を持ってほしいという事、そして一人でも多くの者に学連の良さを味わってもらいたい。とにかく学連というのは、人間と人間との大なる出会いの場であり、その順列組合せは等比級数的だといっていいくらいなんだから。などと、大げさに言うのも案外学連を去り行く者の感傷かもしれないけれど。とにかく頑張ってくれ。期待している。

神戸大学風韻会　決算報告書（準備1/18）

自S．46年4月　1日
至S．47年1月18日

入		出	
今期徴集部費	55,671	師範謝礼	78,000
秋季特別部費	13,000	三大学	30,775
大学援助金	20,000	秋季発表会	41,930
先輩寄附金	114,350	学連	25,500
雑誌〃風韻〃広告料	21,000	〃風韻〃印刷費	28,000
園遊会純益	27,411	文具費	1,000
雑収	3,295	通信費	13,210
コンパ益	8,520	雑費	10,362
合宿費	233,550	コンパ代援助	7,800
	496,797	普通預金及郵便振替	46,911
前期繰越金	34,121	合宿費	233,550
			517,038
		現金有高	13,880
	530,918		530,918

あしあと　昭和四十六年度

三月

二十一日（日）十九回生歓送謡会　於学生会館ホール
宇治師範・藤井会長・荒川・米花先生・中島・今宿・小川・菊地先輩の出席をいただく

四月

十三日（火）新入生オリエンテーション　於六甲台講堂
仕舞「鉄輪」（河野）

五月

四日（火）三大学交歓謡会　於上田能楽堂
舞囃子「敦盛」（福田）素謡「嵐山」（シテ長沢・ツレ城戸・ワキ山口）連吟「屋島」（シテ米田）「夕顔」（シテ小田）仕舞「高砂」（横山）「草子洗小町」（加藤）「船弁慶」（初井）「天鼓」（志岐）「合浦」（三崎）「屋島」（志智）「井筒」（山本）「桜川」（山中）「芦刈」（中川）「難波」（苅田）「女郎花」（佐伯）「玉髪」（中村）「富士太鼓」（小田）

十四日（金）～十六日（日）ジュニア合宿　於再度山大竜寺

六月

十三日（日）学連春季大会　於上田能楽堂
連吟「橋弁慶」（シテ伊沢・子方浦田）仕舞「高砂」（山口）「網之段」（木村）「野守」（河野）

七月

四日（日）四大学交歓謡会　於甲南大学学生会館
仕舞「舟弁慶」（浦田）「猩々」（寺本）「鶴亀」（伊沢）「吉野天人」（山下）「羽衣」（城戸）「敦盛」（赤木）「屋島」（米田）「清経」（長沢）素謡「三井寺」（シテ小田）連吟「鉄輪」（シテ志智）合同連吟「巴」「鞍馬天狗」

十八日（日）宇治風韻会　於松泉館
有志数名参加

八月

十六日（日）～十八日（水）　強化練習　於部室　三・四年のみ

二十七日（金）～三日（金）夏季強化合宿　於長野県美ケ原山頂
雄大な美ケ原での合宿は厳しくもありまた、楽しいものであった。
菊地・北本・小川・岩本・賀川・田中・根岸の先輩に参加して頂く
練習曲「五番とじ中下」「賀茂」「清経」「屋島」「熊野」

「班女」「善知鳥」「舟弁慶」

十一月

十三日（土）凌霜謡会　於学生会館ホール　三・四年参加
素謡「頼政」連吟「善知鳥」仕舞「野宮」（苅田）「江口」（佐伯）「笠之段」（中村）

二十日（土）第七回秋季発表会　於学生会館ホール
舞　子「高砂」（河野）「清経」（下田）「班女」（小田）「忠度」（米田）「熊坂」（山本）素謡「屋島」（シテ山中・ワキ中川・ツレ城戸）連吟「小鍛冶」（三崎）「女郎花」（苅田）「舟弁慶」（福田）「天鼓」（山口）仕舞「鉄輪」（宇治正夫）
学年別に連吟をやってみた。多数の先輩の出席をいただく。

二十三日（火）六甲台祭園遊会「猩々」開店　於六甲台前庭
朝に雨が降り、客足が心配されたが順調に行けた。昨年のようなハプニングはなかったが、全学的催しではなかったためか入りは良くなかった。

十二月

十一日（土）学連秋季大会　於大槻能楽堂
仕舞「蝉丸」（志岐）「班女」（加藤）「東北」（三崎）「玉髪」（初井）「松風」（横山）舞囃子「熊野」（苅田）

今年から批評会が催される。神大からは「頼政」（シテ志智）を出す。

本年度師範練習曲
「嵐山」「兼平」「鵜飼」「野宮」「桜川」「柏崎」「合浦」

高級婦人服生地御誂切売
テンジョー洋装店
灘区琵琶町1丁目10の11
Tel（851）3630

ベルの洋菓子とパーラー
ソフトクリームとサンドイッチの
パーラーコイケ
阪神御影駅山側
Tel（811）3048

長谷川吉郎　産・婦人科
六甲マタニティクリニック
入院
分娩
手術
診療時間
A.M.9:00～P.M.1:00
P.M.5:00～P.M.7:00
阪急六甲駅浜側東（徒歩七分）
市バス石屋川車庫一筋西上る
電話851－2945代

幹事長就任にあたって

B22　山口　剛

此の度、次期幹事長の大役をお引き受けし、来年度は大変だという感を強く抱いています。といいますのは、第一に大学紛争がおさまり大学がほぼ正常に運営されている現在、我々のサークルも紛争後の路線を確立せねばならぬこと。第二に稽古などで先頭に立ってサークル全体をリードすべき三、四年の男子部員が八名中六名、工学部学生（授業時間数が多いことと、学部から部室まで遠いという条件に制約される）であること。第三に、今年は宇治先生の会の五十五周年という記念すべき年なのですしっかり稽古をしなければならないこと。この三つの情況が我々を取り巻いているからです。

そこで、ただ「大変だ」と言って手をこまねいているばかりでは本当に「大変」なことになってしまいますので、私としましては、常にこのことを頭に入れておき、現実に対処してゆきたいと思います。

つきましては、宇治師範、顧問教官並びに諸先輩方々の、手厳しい御指導をお願いしまして、就任の御挨拶にさせて頂きます。

（新役員紹介）

幹事長	B-22	山口　剛
副幹事長	T-22	中川憲一
広報	P-22	志岐佳代
会計	P-22	三崎典子
学連委員	P-22	加藤美千代
	J-23	寺本博行
文総委員	P-22	初井貴美
書記	T-22	城戸隆一
渉外	T-22	山中明
庶務	P-22	横山博江
学連議長	T-22	長沢洋一

編集後記

河野　豊

今回の雑誌「風韻」は、編集途上で、中心テーマが、「思い出の能」から「藤井茂先生御退官祝賀」に変更されましたためか、原稿の集りが、例年になく悪く、最後まで心配させられましたが、宇治先生・荒川先生の原稿を頂いて、何とか藤井先生を、お送りする形が整い、一同、ほっとしたところです。

なお、諸先輩方にも、藤井先生御退官に際してお言葉を頂きたく、御連絡申し上げたのですが、期日の余裕の無かったせいもあり、満足行く結果を得られなかったのが残念です。

しかし、宇治先生主催、藤井先生定年御退官祝賀記念素謡会には、諸先生方始め、大勢の先輩方が、御出席なさり、先生の御退官をお祝いなされるわけで、そのことを「風韻」にも記するべく、番組を掲載いたしました。やはり謡のクラブは、謡で結ばれるのが、本当なのでしょう。

これからも、皆様の謡を軸とした交友が末長く続くことを祈って筆を置かせて頂きます。

河野税理士事務所
税理士　河野治夫
事務所
大阪市北区岩井町１丁目３
肥後屋ビル３階３０１号
TEL　(06)352-6660

寿し・料理仕出し
魚　勝
TEL　851-3471
阪神御影市場東入口

印刷・印章・事務機・事務用品
ミハラヤ
プリント
ジ　ム
市バス・六甲口　神戸銀行前
TEL　851-0372

コーヒー、紅茶とフレッシュなケーキ等
バラエティ豊かなおもてなしを致します
Morozoff
CHOCOLATE SHOP
モロゾフセンター街ショップ
三宮サンプラザビル１F